

山梨県立甲府第一高等学校哲学対話ワークショップ

日時：2025 年 4 月 19 日（土）12：30～14：40

場所：山梨県立甲府第一高等学校 百周年記念館

山梨県立甲府第一高等学校の探究科では、生徒は社会課題に取り組み、「自己の思考・判断に立脚した真の国際人」を目指します。自分で考えることはそう容易くありません。実際、先に講評で訪れた同高校の発表会では、「貧困問題」などのニュースや先生から聞いた言葉を受け売りして課題設定する例が多く見受けられました。高大接続の一環として「問いを育む」ことを目指し、今回高校にお招きいただいて哲学対話ワークショップを開催しました。

共同で授業するゲスト講師として鈴木径一郎氏（大阪大学社会技術共創研究センター・特任助教）をお招きして、生徒同士の対話を促す場づくりに努めました。学校という〈教える者〉と〈教わる者〉、評価する者・される者の力関係が生じる場で、「なんでも話してよい」という安心感が生まれるようにすること自体がまず一つの課題です。鈴木氏の巧みな導きで生徒たちは徐々に挙手したり互いに整理しきれていない思いを語り出したりするようになりました。多人数での対話のため、はじめはグループワークで話し合い、次いで参加者全員と話を共有しながら、全員参加の対話を進めました。今回は各自、一人ひとりの課題や困りごとを話し合うことを通して、問題を掘り下げていくアプローチを取りました。

結果として、様々な悩み事や問題が出されて共有されたことは成果です。忙しい毎日で特に「時間の問題」が共通した課題として挙げられていました。生きづらさのように各自の抱える問題は、社会の問題としても捉えられます。現時点では、どこまでが各自が自分を変えて順応すべきことなのか、あるいは社会の側で変化させていくべきものなのか、こうした検討をするには及んでおらず、その意味で問題の掘り下げはまだ初期の段階です。また、各自の課題を社会の課題という視点から見つめなおすところに達してもいませんが、これらは今後の課題になるでしょう。

対話の最後に投げかけた「最近一週間で、幸せを感じたことがある人はいますか？」という問いかけには、ほぼ全員が挙手していました。このように問いかけたのは、各自が自身の課題を見つめなおす中で、各々にとって大事にしたいことや譲れないものを自ら見極めていく探究も重要になるからです。それらの価値や意味を吟味することは、翻って周りの人や地域の人にとっての幸せや重要な価値を互いに共有して明らかにすること、たとえば隣人やオンラインで世界の裏側の人の声に耳を傾けるために出かける活動に通じます。ワークショップを通してじわりと滲み出てきた「時間の豊かさ」などのテーマを考え続け、互いに言葉を紡ぎ、芽生え始めた問いを地域で育んでももらいたいと思う対話の機会になりました。

実は生徒が悩んでいるそうした課題は大人の課題でもあり、応じていくことはこれまで社会を築いてきた大人の責務でもあります。生徒の声に応答することについて、鈴木氏の丁寧なやりとりを見ていると、先回りして大人が思う答えを与えて探究者の探究プロセスを

取り上げない忍耐強さの重要性にも気づかされます。

ワークショップの冒頭では、受け売りしがちな社会課題に関するニュースなどの言葉はいったん脇に置き、各自が周りの人との「インタラクション（やりとり）」から自分たちの課題を共有し、発見する姿勢を取ろうという趣旨の宣言をしていました。これを徹底して、「大人も共に」考えざるを得ない問い、大人も簡単に答えが出ないだけでなく、もしかしたら答えがないかもしれない問いに突き当たることもあるでしょう。その先にこそ、大人から与えられたものではない「自己の思考」が初めて芽生えるのかもしれません。

山梨県立大学地域人材養成センター・特任准教授

山崎スコウ 竜二

